

# 能代高

⑤

## 小二郎と大二郎

ここに取り出しましたレンズが一つ。何かご質問はございませんか？いや、手品師みたいなことをいつている場合じゃないのだ。今福兼蔵先生（国漢）のカミナリが、たつた今落ちた。「コラッ、岸部。お前、何をコソコソしとつたんか！」岸部は、小学生のころから近眼である。通学途中、米代川の橋にあっていた穴からドボンしそうになったことが二度、三度……。

ところが、めがねをかけるのは、絶対にいやだった。女学生にカッコよく見られたいという大それた「夢」があつたわけでもないのだが、とにかくめがねはいやだった。めがねはかけない代わりに一個のレンズを常に携帯していた。このレンズは、姉が以前使っていためがねの片方だけを失敬したものだった。黒板の字を見る時など、ポケットから取り出して活用した。今福先生が岸部をとがめたのは、ちょうどテストの時。カンニングとカン違いしたからだ。岸部が初めてめがねを買ったのは、その直後だ。自分で驚くほど成績が上向いた。「あの時、今福先生にしゃべられて（おこられての意味）いねかつたら……」いまも先生に感謝している。その岸部二郎（元能代市立一中教諭、文具商）と同じ一期生に、なんともう一人、岸部二郎（元営林署勤務）がいた。

「ええ、確かにいたすよ。偶然だべども、おもしろもんだすな」半世紀前の中学時代のできごととは、ほとんどがおぼろげの佐々木正之（元横手高校長）、小山幹朗（元大館南高校長）も、同期の「両岸部」は忘れない。「何十年も教師をやつたども、同姓同名の同級生がいたのは、他にねかつたすな」佐々木がそういうくらいだから、極めて珍しいケースだ。「やあ、キミ、岸部君だてが」「んだ。キミも岸部君だべ」二人は、入学後間もなく、そんな自己紹介をし合つたことを記憶している。今福先生の忠告でめがねをかけるようになった岸部は、向能代出身。正しくはキシベ・ジロ一という。もう一人は、町うちの幸町生まれ。キシベ・ニロ一と読むのがほんど。

「入学したその年は、あの二人、クラスが別々であつたし、オレたちが二人を間違える心配はまずねかつたすな」と、小笠原（旧姓藤田）順蔵（山本町社会教育指導員）。とはいえ、まぎらわしいことも事実。ほどなくして、こんなことで級友の意見が一致した。「いいがな。向能代の岸部君は、背が高げから、大二郎とすべし」「そすれば、小せほうの岸部君は、小二郎でいぐねが」「秀才。そろいの生徒たちだけに、ズバリ特徴をとらえた。二人とも、非常におとなしくまじめな性格。それでもテストの答案用紙を返してもらつた時など笑わせた。「どうも変だな。オレの点数だばもつといがつたはずだす。あつちの岸部君と間違えられた

んでねべがな」

しかし、先生のほうだつてちやんと心得ていて、そんなへまはしない。

というのは、テスト用紙の氏名欄に、岸部二郎（大）とか、岸部二郎（小）というあんばいに、必ず（大）（小）をつけ加えるよう二人に指示した。

便所でもあるまいに、という気がしないでもないが、カツコ内を見れば、二人を取り違えることはない。

ジローの話だと、二人は遠い親せき同士。だが、中学生になるまで一度も会ったことがなかった。親のほうも、まさか中学で一緒になるなどと夢にも思わずに、それぞれ「二郎」としたらしい。

ジローは、目が悪いのでボールを追いかけるのが不得意、野球をやってみたかったが、結局

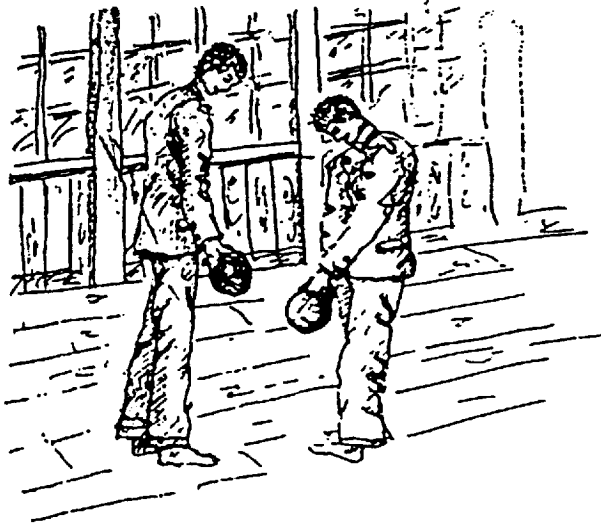
砲丸投げなどに力を入れた。これなら、タマを見失うなんてこともない。二ローも、走るのが二ガテで、運動部では弓道部で活躍した。

二人とも育ち盛り。とくに二ローは、成長が目に見えた。上級生になると、背が「大二郎」より高くなってしまった。

親友の長谷川泰蔵（商業）に、二ローはこういった。

「オレのほうが大きくなったども、まだ小二郎だつてが……」

（敬称略）



さし絵は戸松恭一（新11期・能代高教諭）